

1-4-1. 利尻富士町産業振興課（北海道利尻富士町）

(1) アドバイザー派遣申請の背景

●地域の概要

【人口】 2,650 人

【面積】 約 106 km²

【地勢】

北海道最北端宗谷岬より南西 62km の海を隔てた日本海の離島、利尻島の北東部に位置し、東西約 11.5km、南北 18.1km で島の 59%を占めている。

【気候、自然】

気象は沿岸一帯を流れる対馬暖流によって受ける影響が極めて大きく、四季を通じての最高気温は約 30 度、最低でも零下 15 度以下になる事はまれで、夏は涼しく冬は積雪も少なく恵まれてはいるが、季節風が他地域にみられないほど強く、典型的な北方離島特有の自然条件下にある。

【歴史】

利尻島は約 1 万 3000 年前の旧石器時代から人が住んでいるといわれており、縄文時代や擦文文化等の遺跡も発見されている。

江戸時代には松前藩によるリシリ場所が開かれ、和人と利尻に住むアイヌとの間で海産物の交易を行っていたと考えられている。また、ロシアの南下に対する警備ため、会津藩士約 250 名が数か月間にわたり利尻島に派遣されたり「日本で最初の英語教師と言われているアメリカの青年、ラナルド・マクドナルドが日本語を覚え通訳になる事を目指し利尻島に上陸した。明治以降、鯨漁や昆布漁を中心とした漁業が盛んになり、東北や日本海沿岸を中心とした各地から多くの人が移住してきたが、昭和 31 年頃から鯨漁が不振となり、これと共に人口の減少が著しく、過疎化と高齢化が進行している状況にある。

【観光】

利尻島は、昭和 49 年 9 月 20 日、全国で 27 番目の国立公園として指定された、「利尻・礼文・サロベツ国立公園」の中に位置している。

島の中心、日本百名山の一つである利尻山を中心に島の周囲に「姫沼」「オタドリ沼」等の自然景観や高山植物等の観光資源に恵まれているが、観光客の入込は平成 15 年度をピークに年々減少しており、団体旅行から個人旅行に推移していく旅行形態の変化に対応が出来ていなかったものと思われる。

こうしたことから、地域資源の掘り起こしによる滞在型観光への転換や、外国人観光客の誘致対策など、町独自の取り組みはもとより、関係自治体等と広域的に連携し、観光施策の展開に取り組んでいる。

【地域資源の概要】

日本百名山の利尻山、日本名水百選の甘露泉水、森林浴の森百選の自然休養林や、山から海岸まで咲く花、クマガラなどの野鳥が生息するなど豊かな自然を抱え、その海で育まれたウニや利尻昆布などの海産物も地域の特産品となっている。また、近世から近現代にかけて行なわれた鯨漁や昆布漁など、当時の記憶を伝える漁業遺産群や歴史・文化等の地域遺産が残されている。

●アドバイザー派遣申請の背景・これまでの取り組み

利尻富士町では、1974（昭和 49）年に「利尻・礼文・サロベツ国立公園」に指定された頃から「離島ブーム」が訪れ、日本百名山（利尻山）、日本名水百選（甘露泉水）、森林浴の森百選（自然休養林）といった3つの日本百選に選定された観光資源にも恵まれたことから、旅行代理店等による大型観光バスを使ったマストツーリズムが主流であった。

しかし、平成 15 年以降は減少傾向へと転じ、平成 24 年には観光入込客数がピーク時から 10 万人以上減少した約 15 万人まで落ち込んでいる。他方で、良好な漁場を背景に江戸時代から漁業が盛んに営まれており、自然生態系との関係はもちろんのこと、関連した遺構等の構造物や慣習など文化遺産が数多く残されている。そこで、昨年度からは、利尻（漁業）遺産の価値を明らかにし、観光資源とするための取り組みが実施されている。特に当該地域において、人が自然形態とどのように暮らしを営む仕組みを形成したかを明らかにするため、フェノロジーカレンダーやお宝マップの作成に取り組むなど、利尻遺産の価値を明らかにし、ブランディングに関する取り組みを進めているが、他方で、遺産の価値を生かすツアーの企画力や商品化力、あるいはガイドそのものが不足している状況にある。そのため、利尻遺産を生かすためのエコツーリズムを展開するため、エコツアーの商品化やガイド養成が課題となっている。

(2) アドバイザー派遣の実施概要

日 時	平成 29 年 3 月 20 日（月）～平成 29 年 3 月 23 日（木）
場 所	北海道利尻郡利尻富士町（利尻島）
ア ド バ イ ザ ー	松田光輝氏（株式会社知床ネイチャーオフィス 代表取締役社長）
参 加 者	計 22 名 利尻富士町観光協会・利尻町観光協会・環境省稚内自然保護官事務所・北海道教育大学・元利尻町立博物館員・(株)ノーザンクロス・利尻富士町教育委員会・利尻富士町地域おこし協力隊・利尻町地域おこし協力隊・利尻富士町役場
スケジュール・方法	【1 日目】 15:30～17:15 利尻富士町役場で講習会・視察に関する打合せ 【2 日目】 午前 9:00～12:30 利尻島内視察（一周） 鴛泊～袋間～郷土資料館（車窓）～金崎ウミネコ繁殖地～白い恋人の丘～オタドリ沼～御崎公園～神居海岸パーク（車窓）～杓形岬公園～ポロフンベ集落～旧本泊小学校～富士野園地～鴛泊 午後 講習資料等の作成 【3 日目】 9:30～12:30 講習会（場所 利尻富士町総合交流促進施設 りぷら） 移動 利尻富士町出発（15:15）～札幌

(3) アドバイスの内容（講義等）

日本の観光産業は弱い立場にある。日本の人口減少傾向に伴い観光客も減る。今以上にライバルとなる地域が多くなり、海外もライバルとなる。世界遺産等は、自国民より外国人にうける。歴史は資源になる。観光振興を図るうえで、他の地域を知ること大切である。知床の事例を中心に紹介していくが、どこが一番か切り口を見つけると知床より有利になる。

利尻の資源についてきちんと調べて謳っていく必要がある。利尻の資源の有効性を知る。アザラシを見せるツアーは国内では本州の人は喜ぶだろう。世界中からも人気が高いので、利尻でもホエールウォッチングなどの需要は可能性があるかも。サケ・マスの遡上も有効な資源である。利尻が知床より有利なところは、花が売れることである。それは大型の採食動物がいないので植物が保全されているため。見せ方を工夫していくことが大事。

昔、流氷は厄介者であったが、今や流氷観光として位置づけされている。厄介者も切り口を変えると資源となる。

エコツアーガイド収入だけで利尻島で食べていけるのか？日本のエコツアーガイドの収入は平均で200万円前後といわれている。

又、利尻島でも少しずつ上昇傾向にある冬山を活用した「バックカントリースキー」については、1人当たり（2日間）のガイド料単価は5万円以上を取っている。

エコツアーの可能性について考えると、エコツアーが成立する条件として3点あるが、外国人はクオリティの高いものを出せば高いものでも可、外国人の7割は再訪したいと思っており、1番は食、2番は自然の順であるが、残念ながら利尻は情報発信していない、利尻の認知度を上げていかなければならない。

漁業遺産を活用した部分では、昨年度より実施されたと聞いている「昆布の語り部」を行っている会場（現状は廃校となった校舎の一部）を番屋風に似せた空間として見せていくことが良いと思う。

利尻の星空観察ツアーの利潤はどうか。知床は天気が悪ければ動物ウォッチングをする。動物を見ながらだと切り替えていける柔軟性がある。ガイドツアーは安くやらないほうが良い。相場が下がる。単価の安いものをたくさんやっても収益は上がらない。

日本における外国人の受け入れ比率を全体の30%に持っていけないと、日本の人口が減少していることから将来的に厳しくなる。今後、観光が成り立たなくなる。観光を維持していくことはインフラの維持にもつながる。

子供たちは未来の広告塔である。都会へ旅立つ子供たちは地域の広告塔になる。そのためにも地元での自然学習は重要である。

<意見交換>

Q ガイドの紹介に関する問い合わせがよくある。島を訪れる個人旅行者は目的を持った人がほとんどである。実際に知床エコツアーガイドの需要はいつぐらいから確立されてきたのか？

A 20 数年前からである。元々は知床財団で活動していた。その後独立したが最初の5年間は仕事を確保するのに苦労した。旅行会社をうまく活用すべきだが、スタッフの確保が困難だった。ガイド同士が情報を共有し、エリア全体に人を呼び込む手段を考えていかなければならない。現代の情報化社会が進む中では、将来ガイド需要は減るかもしれない。タブレット式ガイドなどが開発されてくれば、現地にガイドが出向かなくてもできる時代も来るだろう。でも、それを逆手にとって対応することも必要である。知床は道内のユーザーが多い。ここが利尻と違うところである。

Q ガイドの収入は？

A 知床の来訪者の構成は、4割団体、4割個人、1割修学旅行、1割社員旅行や同好会等となっており、30代後半のガイドを例にとると年収で500万円程度となっている。

又、各ガイドの評価（参加者のアンケート等）も、給与や賞与の査定に活用しており、それは各ガイドの普段の業務に対するモチベーションに繋がっていくものと考えている。

Q ガイドは地元出身か？

A 地元は自分だけである。

Q 北方領土が返還になった場合、知床の観光の関係について

A 具体的にはわからないが、観光開発はロシアの国内法の関係もあり、難しいのではないかな。あそこには大型の草食動物がいなくて花が豊富だと思う。将来的には利尻・知床のライバルになることも考えられると思う。社会の構造は必ず変わっていく。このままではやっていけないことを地元でも認識していただきたい。これからの強みは自転車（サイクルツーリズム）だと思う。アジア圏の人々は花と景色などの情緒的なものを好み、欧米系はトレッキング、登山、自転車などのアクティビティを好む傾向にある。バードウォッチングも当然有効だと思う。

今後、利尻と知床と連携・情報交換ができる関係になれば良いと思っている。

Q 今後エコツーリズムを推進していく事について重要な事やアドバイスは？

A アドバイスとして、利尻富士町と利尻町と連携してガイド協議会みたいなものを作ったほうが良い。また、リスク対応としてガイドの保険（損害・傷害・賠償）などを各事業者が認識しなければならない。行政支援でやる場合も同様に保険関係をきちんとすること。

利尻富士町役場で講習会・視察に関する打合せ



利尻島内視察（袋間）



利尻島内視察（白い恋人の丘）



講習会（利尻富士町総合交流促進施設りぷら）



（４） アドバイザー派遣実施の効果

1) 参加者や関係者に与えた効果

エコツーリズム、又は、地域資源について理解が得られた。

- ・利尻の資源についてきちんと調べて、その有効性を知ることが大切である。
- ・大型の草食動物がいないことから、花等の植生が保たれているので見せ方を工夫すればよい。
- ・アザラシ、ホエールウォッチング、サケの遡上など有効な資源として考えられる。

今まで課題としていたことがより明確になった

- ・利尻は、キーコンテンツとなる景観へのアクセスが容易であることから、ストーリーが作れない、感動的な瞬間を作れない、他の自然資源が薄れてしまうことがある。今後の導線作りを検討しなければならない。
- ・情報発信をしていない。（まだまだ少ない。）

今までの課題に対して取り組み方がわかった。

- ・流水のように、厄介者も切り口を変えると観光資源となる。
- ・利尻の認知度を高めるために、情報発信を積極的に行う。
- ・外国人の7割が再訪したいと考えていることから、クオリティの高いものを出していく。

2) 今後、期待される効果

- ・地域に密着した地元ガイドや多様なプログラムへの対応を図ることで、リピーターの獲得や滞在型観光の推進が図られる。

3) 今後の取り組み

- ・滞在型観光への推進を図るため、行政や関係団体、地元ガイド等との連携を充実させる。
- ・行政等が研究した体験メニュー等のプログラム化を地元ガイドとともに進める。併せて、既存のエコツーリズムの磨き上げや、多様な組み合わせにより、他の地域にはない魅力的な資源を作り上げる。

(5) 今後の取り組み推進にあたり参考となった事項、その他感想

1) 参考となった事項

- ・エコツアーが成功する条件
- ・知床で行われている主なエコツアーとその取り組み
- ・知床が抱える課題とその解決策を探る試行など

2) その他感想

- ・アドバイザーの松田氏の豊富な経験による講習であり、大変参考となった。
- ・滞在型観光を推進するうえで大切な役割を果たすガイドの生計を考慮した提言や、利尻の資源の有効性を今一度考えさせられる有意義な講習であった。

(6) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

松田 光輝氏 (株式会社知床ネイチャーオフィス 代表取締役社長)

1) 地域における取組の現状と課題

①現状の取組

低標高から自生する高山植物や湿原などの花々を題材としたエコツアーが盛んな地域である。しかし、平成 15 年度をピークに観光客は年々減少傾向にあるとともに、旅行会社が企画する団体旅行から個人旅行に移行しつつある。のべ宿泊人数を増やすため滞在型観光を模索し、新たな観光資源の掘り起こしを推進。昨年度は、北海道教育大学函館校の学生の協力のもと「自然・人と暮らし・産業」などのフェノロジーカレンダーの作成も手掛け、漁業体験活動や漁業遺産を中心に、新たな観光資源の活用を目指している。

②課題

花を素材にしたエコツアーは定着しているが、グリーンシーズンの短い当該地域は、開花期間は短く、エコツアーガイドが収益を得られる期間は 2 カ月程度である。一部のエコツアーガイドは冬期間の利尻山にてバックカントリースキーを行っているが、冬山の知識と山スキーの高いスキルが求められるため、誰でも簡単に習得できる知識・技術ではない。ほとんどのエコツアーガイドは副業を行い、生計を成り立たせているのが現状である。若いエコツアーガイドを定着させるためには、花を素材としたエコツアー以外の開発が喫緊の課題である。

2) 特に魅力を感じた地域資源等

①魅力を感じた地域資源

- 利尻山と湖沼の景観
- 沿岸で休憩するゴマフアザラシ
- 料理設備のある多目的施設（廃校された小学校）

②上記地域資源に魅力を感じた理由

- 「海に浮かぶ山」の呼称にふさわしい、優雅な独立峰は見た者すべてに感動を与える景色である。しかし、島の随所から山が見えるため、ストーリー性を持たせた利尻山のコースづくりが必要である。
- 観光客が北海道観光に期待するものは、豊かな自然と野生動物との出会いである。比較的至近距離で安定的に見られる野生動物は、エコツアーの資源としては非常に魅力的である。特に海棲哺乳類を観察できる場所は日本では限られており、有益な観光資源となりうる。
- 自然・文化の魅力を分かり易く伝えるためには、野外におけるエコツアーだけでは限界がある。屋内での展示やレクチャーはそれを補うことができる。また、悪天候時の代替えプログラムも実施可能なため、滞在型観光を推進するためには有利となる。調理設備もあるため、食文化や地域産業を絡めたプログラム作りにも活用ができる。

3) アドバイス（講義等）の概要

- ・ 利尻島における資源を用いたエコツアーの可能性（優位性のある資源）
- ・ 利用方法・利用者をコントロールしつつ、魅力を高めるための方策（例：利用調整制度による知床五湖の取組等）
- ・ 漁業遺産活用の可能性と課題
- ・ リピーター獲得の必要性和エコツアーガイド（職業として）の収入の安定化の必要性
- ・ 体験施設の活用方法と施設内の演出方法

4) エコツーリズム推進全体構想への取り組み状況・意向について

①全体構想への取組状況について

具体的な取り組みはなく、全体構想についての知見もあまりない。

②全体構想策定への意向について

将来的に取り組む可能性はあるが、現時点ではその段階ではない。

③全体構想認定に向けて、今後必要なこと

利尻島におけるエコツーリズムの広域連携。

5) 地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

資源性の高い地域ではあるので、今後、外国人観光客も含めエコツアーを推進するには有利な地域だと思われる。島へのアクセスが限定され誘客には不利な要素もあるので、滞在日数を如何に延ばすかが重要になる。そのためには、新たな散策ルートの整備や地域産業も絡めたプログラム作りが必要となる。現在ある漁業遺産を活用するためにも、早急な保存・整備を行わなければならない。しかし、漁業遺産だけで誘客することは難しいと考えられ、食に結びつけることが重要だと思われる。漁業遺産をよりリアルに感じてもらうためには、現地ならではの食も体験させることをお勧めしたい。

また、漁業遺産は島内に点在しているため、移動手段の確保が必要となり「白タク問題」がある。解決策としては、エコツーリズム推進全体構想の認定を受けることが法的解決手段となるので、検討することをお勧めする。全体構想の作成は、まだ、不十分なエコツーリズムの推進組織体制の構築や島内の連携、エコツアーガイド同士の連携体制の確立にも寄与する。観光客に魅力ある地域として感じてもらうためには、隣接する利尻町や礼文島と一体となった推進体制が望ましいと思うので、行政区を越えた取り組みに期待したい。